

ウルトラマンの青いリュック

山口県 杉山 初美

「ウルトラマンのリュックでいい。」

三歳の娘が、私に言った。親子遠足の二日前の出来事だ。

二歳上のお兄ちゃんは小児ぜんそくで、よく発作を起こすので幼稚園は休みがちだった。娘も同じ幼稚園に入園し、恒例行事である親子遠足の日が近づいていた。

ところが、私はそのことを忘れていたのである。お兄ちゃんの体調が悪く、それどころではなかったとはいえ、二日前まできれいさっぱり忘れていた自分に呆れた。

親子遠足というからには、母親の私がついて行かなければならない。上野動物園。パンダも見たい。でも、お兄ちゃんを置いては行けない。職場を異動したばかりの夫も、連日残業で休めない。娘には遠足を諦めてもらうしかないか……。母親の私にべったりの子であるから、すんなり納得するだろうと思いきや冒頭のセリフが飛び出したのである。

なぜ、リュックの話になるのか。これまた私の落ち度なのだが、娘の初めての行事なのに、娘用のリュックサックを用意していなかったのだ。自分のミスを棚に上げて、リュックが無いことを理由に娘を説得にかかる。

「お兄ちゃんが使ったウルトラマンの青いのしかないよ。」

と言ってみた。青いのじゃイヤだと泣くかなと思っただが、娘は無言で私を見る。

「お兄ちゃん病気だから、お母さんは一緒に行けないよ。お友達はみんな、お母さんと一緒だよ。荷物が重くても自分で持たないといけないよ。遠足はお休みしよう。」

娘はゆっくりと、でもしっかりと言った。

「ウルトラマンのリュックでいい。お母さんもいなくていい。遠足に行きたい。」

私は一瞬言葉を失った。そんなに楽しみにしていたとは。当時、娘は成長が遅く、身長は園で一番チビ、言葉も拙くてトイレの失敗も数知れず。いつも私にひっついていてこの子が、一人でも遠足に行くと言ったのだ。

「これは何としても行かせてやりたい。」

と思い、遠足前日に担任の先生に相談した。しかし、反応は良くなかった。

「上野動物園に入ったら、帰りの集合時間まで自由行動です。毎年、親子で動物園を楽しまれているので、一人だけ先生と行動するのもどうかと。それに前例がありません。」

なるほど。うーん。お兄ちゃんのとくもそうだったかしら。あのときは幼い娘も連れての

参加で、ぐずりっぱなしの娘の世話でくたくたになったことしか思い出せない。お兄ちゃん、ごめん。しかし、前例が無いのか…。

そのとき、たまたま園に来ていた同じクラスのママ友が「先生、大丈夫よ。うちの子と一緒に私が見るから。」と、救いの手を差し伸べてくれたのだ。前例が無いことを気にする先生を半ば強引に説き伏せ、子どもだけで参加する許可をいただいた。私は、いつも明るく元気なママ友の申し出を、ありがたく受けることにした。

遠足当日、ウルトラマンの青いリュックを背負った娘の出発を、おんぶしたお兄ちゃんと二人で園庭から見送った。

泣いてないかな。迷子になってないかな。心配は尽きず、ずっと時計ばかり見ていた気がする。お迎えの時間、お兄ちゃんをおんぶして急いで幼稚園に向かった。時間通りにバスは到着し、娘はリュックを背負って笑顔で降りてきた。お世話を買って出てくれたママ友に、何度も何度もお礼を言った。

「すごくいい子だったよ。」

と言う彼女の目に涙が光っていた。涙ぐむママ友を不思議に思いながら、園を後にした。

後日彼女が、写真を見ながら話してくれたことで、すべてを悟った。娘がリュックを自分で持つと言いつ張ったこと。みんなが、アイスを買ってもらっていても「大丈夫、いらぬい。」と言ったこと。わがままを一切言わず、みんなのそばで機嫌よく過ごしていたこと。お弁当を食べるとき以外は、ずっとリュックを背負っていたこと…。

「こんなに小さいのに、本当に健気で…。」

子ども達が遊んでいる写真の中で、娘は仁王立ちで写っていた。体より大きいウルトラマンの青いリュックを背負って。両手はリュックの紐を握りしめて。私が「荷物は自分で」と何気なく言ってしまったから、それをちゃんと守ったのだ。お友達が母親と一緒に楽しんでる姿を、どんな気持ちで見ているのか、さぞかし心細かったに違いない。そんな娘の気持ちと思うと、ついに行つてやれなかったこと、リュックを用意していなかったことが申し訳なく、色んな思いがこみ上げて涙があふれた。でも、写真の中の娘はどこか誇らしげで、頑張った娘が確かにそこにいた。

その娘も、もう二十五歳。この出来事を全く覚えていないようだ。しかし、私にとっては一生忘れることのない、とても大切な思い出である。